

北吟吉と土田杏村を憶う

中村 元

学会が学問を追求する場所は、どこでもよい。なにも特権的な狭い大学に限る必要はない。汚らしい立看板、貼札や、怒号の聞えるところは、学問追求にふさわしくない。独自の精神文化の伝統をもつ佐渡の方々の熱意に答えて、今回は、この北国の島で比較思想学会の大会を開くことにした。

そこで、公開講演会が開かれることになったので、わたくしは、若い時に多大の刺戟・激発を受けた土田杏村と北吟吉という二人の哲人が佐渡の出身であるので、この二人についての想い出と感想を語ることにした。この二人は、日本の哲学界の主流に対してつねに批判的な意見をもっていた人である。

北吟吉の『哲学行脚』は、禅とエックハルトの相互理解を示し、またタゴールに対するドイツの哲学教授たちの反応を示しているのが興味深い。かれがわざわざヘフディングの『近世哲学史』を

特に選んで翻訳したのは、観念論的な哲学史ではなくて、実証主義的方面や文明論的立場に理解を示していることを評価しているからである。

土田杏村は、勇ましい学者であった。一生教職につかず、専ら文筆による批判的態度を堅持した。かれは「生涯にわたる教育」を主張して、学校概念の革命をとなえた。かれは、日本の学会に顕著なセクシヨナリズムを踏み躪った人であった。かれの哲学的立場を示す『象徴の哲学』は、多分に華嚴の哲学を借りているが、そこに見られる思索は、土田杏村がわが国の生んだ一人の独創的な思想家・哲学者であったことを示している。

二人とも、理想主義者であり、反骨の哲学者であった。

荒波の佐渡に育った北吟吉が、一介の学者でありながら、みずから「祖国」という雑誌を刊行し、その中で中里介山をして聖徳

太子の夢殿をテーマにして連載小説を書かせている。——これこそロマンチズムの極致ではなからうか。

〔この講演は、会員・栗原英二氏が録音し文章化され、近く中村「比較思想の先駆者たち」(広池学園出版部)のうちにおさめて刊行されるはずである。資料については、峰島旭雄氏からいろいろ提供されたことを感謝する。〕

(なかむら・はじめ、仏教学・インド哲学・比較思想、

比較思想学会会長・東方学院院长)